

北埼玉に注射剤専用2号棟

24年稼働、生産能力倍増

高田製薬は、北埼玉工場（埼玉県加須市）に建設中の注射剤専用の2号棟を今冬に竣工、2024年2月の稼働を目指す。約100億円を投じ、導入する最先端の設備と技術により、高品質の高薬理活性製剤を製造する拠点を構築する。注射剤の生産拠点の国内回帰、分散化、複数ライン化、増産体制を整え、安定供給体制を強化する。



高田社長

高田製薬

2号棟の生産能力は高活性バイアル、一般無菌バイアル共に年間500万本超。高田浩樹社長は、「今、強く求められている増産体制に加え、

備した無菌管理と封じ込めを実施する。この規模の工場は国内にはあまりなく、品質、生産量とも国際的に十分な競争力を持つ」と自信を見せる。同社は、自社のみが供給する製品や国内シェア

が、高い製品もあることも踏まえ製造体制を強化してきた。2号棟の稼働により、全工場を合わせた注射剤の生産能力は、将来に備えたフロアの活用を含めると合計で年2600万本と倍増する。事業の強化につながる

け治療用アプリなど、様々な形で治療貢献に挑戦して事業拡大を図るが、やみくもに規模を求めるのではなく、小児科、耳鼻咽喉科の領域に集中して進めたい」と語る。新規事業として、アスト

ラゼネカが立ち上げたオープンインベーションイニシアチブ「i2.JP」への参画も注目される。ヘルスケアベンチャー、自治体やアカデミアと連携し、医療課題の解決を図る取り組みにジェネリックメーカーが参画したのは初めて。

高田氏は、「私たちは付加価値を持つ医薬品の開発に強みを持つ。モノづくりで培った経験や技

術を、私たちにはないアイデアを持つ会社と、患者様中心となるモノづくり、コトづくりを進めたい。何かをする、というより、何かができるのではないかと、という思いで参画した」と参画の意図を説明する。

主力のジェネリック医薬品事業では、多くの製品が限定出荷状態にある一方で増産も急ぐ。高田氏は、「限定出荷状態を少しでも早く解消すべく、幸手工場でも増設を進めているが、機械が入って来ず遅れている。品質管理も自主点検し、必要などころに人材確保、異動を含め体制強化に努めている」と現状を明かす。

先発品にない剤形など特徴ある製品で小児科、耳鼻咽喉科領域で確固たる地位の確立を図るが、そのために高田氏は、製品の開発、販売に加え「医療従事者の方々が必要とされる情報の発信が重要だ」と述べる。そこで4月、約90人のMRに加え、Zoom面談を行う「TAKATAオンライン専任MR」を新設した。現在4人体制だが、需要に応じ増員も視野にある。

面談は9時〜17時（土日祝と同社休業日除く）、面談受付は24時間可能。高田氏は「医療従事者の方が面談したい時に面談できるようにしたり、ウェブを使った説明